

もしわれわれがこの物語を信じるならば、
それはまたわれわれを救うことになるだろう。
(プラトン)

—

二〇二九年十二月一日、与野党十年來の検討課題項目であった、
「シニア大相撲協会法」

が、国会の衆参両院に於いて、全会一致で可決成立された。

計上された予算は年間三億円、スポーツ庁管轄、公益財団法人、
「シニア大相撲協会」

が設立された。

予算規模の割に、大手新聞各社は、スポーツ欄にほんの数行掲載しただけであり、
テレビでは、ニュースでもワイドショーでもまったく取り上げられることがなかった。

ネットユーザーも無関心であったが、

「シニア力士募集」

の内容だけは、

「シニア大相撲協会・ホームページ」

で公表され、大手新聞の折り込チラシで配布され、公募雑誌に掲載された。

ちなみにその内容はどういうわけか、シニアというよりもシルバーというイメージが濃厚であった。

そのさいの、

「募集要項（十箇条）」

は、次のとおりである。

- 一、満六十歳に満たない者は応募できない。
- 二、戸籍上日本人でない者は応募できない。
- 三、戸籍上男性でない者は応募できない。
- 四、保護者、配偶者の有無を問わない。
- 五、住居、職業の有無を問わない。
- 六、大病歴、手術歴、持病の有無を問わない。
- 七、前科、精神障害の有無を問わない。
- 八、嗜好、思想、学歴を問わない。
- 九、運動神経、運動能力の大小を問わない。
- 十、相撲及び格闘技未経験者可。

- *力士希望者はシニア大相撲・準備委員会まで。
- *募集要項に反していなければ総て採用。
- *一ヶ月間の訓練（前相撲）を経てその結果で番付作成。
- *初場所に於いてその地位に関わらず土俵に上がる。

締め切りは二〇三〇年二月末日だったが、三ヶ月もあったのに、予想に反して応募者はすくなかった。

高齢者たちの間で、せいぜい話題にのぼったのは、既成の、

「日本相撲協会」

に付いていない、

「大」

が、どうして新生のシニア大相撲協会にはついていないのだろうかという、ナゾナゾめいた問いくらいのものであった。

しかたなく関係者は、タニマチとかんがえているスポーツ庁の権威を振り回し、張り手をかます調子で、各地域の、

「シルバー人材センター」

に協力を要請した。

登録者は総て還暦を越えているので、男性なら候補者なのである。

番付表に載れば、三役平幕の区別なく一定の給与が保証されると聞いて、その気になった登録者たちは、訓練期間中も時給二千元という破格の手当てが出ることを知ると、疑り深い者や、体を動かすのが億劫な者や、自分の裸にきわめて自信のない者の他はおおよそ応募した。

応募者がなかなか増えていかないなかでも、スポーツ庁の精鋭からなるシニア大相撲協会・開発委員会は地道に四股を踏むやりかたで、着々と活動を行っていた。

公益云々に疑問を抱いていても、日本相撲協会はシニア大相撲協会がとうていライバルにはなりえないとの判断もあり、一応の協力をすると公表した。

具体的には、大部屋の各一門が、部屋付きの年寄りを一名ずつ提供した。

十名の年寄りが部屋の親方となり、自動的に十のシニア相撲部屋ができた。

部屋名を付けるにあたっては、苦労がまったくなかった。

伝統も年寄り株もないわけだから、世間にわかりやすいのが一番と、それでも協会名に、

「大」

が付いているのを気にして、

「中と小」

なら謙虚でもあるからよかろうとあいなった。

中山部屋、中川部屋、中海部屋、中里部屋、中谷部屋、小山部屋、小川部屋、小海部屋、小里部屋、小谷部屋、と決まり、親方会議でもめたのは、問題は理事長を誰にするかということであった。

しかたなく阿弥陀籤で、と提案する者もあったが、スポーツ庁の思惑を付度した

ほうがいいということになり、それならばと、西園寺金時氏に即決された。

というのは、今回の議案はもともと、かつて政界のドンであった松本玄信の弟子筋から出た話であり、その弟子筋のいわばパトロンが西園寺金時であったからなのである。

*

百名余りのシニア力士候補者は、一ヶ月月間の前相撲で、きっちり三十名になる。骨折十三名、ギックリ腰四名、血圧急上昇で倒れた者十一名、疲れ果てた者二十五名、うんざりした者二十一名、その他三名。

予定していた人員の十分の一ではあったが、親方たちは気落ちすることもなく、ドラフト会議をやって力士たちの所属部屋を決める。

各部屋三名ずつだが、三役は前相撲の成績で決めた。

大関二名、関脇二名、小結二名、当面横綱は置かず、本場所の成績いかんで決めることになった。

のこりの二十四名は平幕だから、つまり前頭は東西筆頭から十二枚目まで。

四股名はもともと、

「醜名」

であり、醜には謙遜の意味と強いという意味があるが、後者を選び、親方と本人とで、できうるかぎり強そうな名前をこしらえた。

とうぜんながらだれもタニマチはいないので、またとうぜんながらテレビ放映もないので、まわしは本番でも稽古用の白いものを使うことにした。

よって、

「さがり」

も付けなかったが、これは注連縄の意味もあり、神事と関係があるためでもあった。

同様の理由で、

「地鎮する」

という神事の意味がある四股すらもやらないこととした。

邪気をはらうための塩まきは、予算の都合もあるが、邪気こそ貴重との意見が強く、これもやらないこととした。

三十名との契約も無事に済み、形だけでも陣容は整ったと、日本相撲協会の本場所スケジュールは無視して、五月五日からを記念すべき初興行場所とした。

もしかちあっても、勇み足にはなりえないはずだと、シニア大相撲協会は踏んだわけである。

それでもシニア力士たちの総意を聴き取り、本場所十日間、年間三場所、巡業場所はなしとした。

そうそう、大切な給与であるが、一場所休場せずに取り終えたシニア力士にのみ、一律の税込み十万円と設定された。

むろん約束がちがうと騒ぐ者もすくなくはなかったが、満員御礼になればボーナスを出す、優勝と三賞受賞者にはお国からスポーツ庁長官賞も出るだろう。

いずれ懸賞もあるだろうし、負け越さなければ親方から金一封が出るだろう。

おひねりだって認めるなどなど、西園寺理事長が口からでまかせにあれこれいつて宥めた。

さらに経費節減の意味から、

「床山と呼び出し」

は置かず、

「行司」

も烏帽子直垂を鉢巻作務衣に代えて、力士が兼ねることとした。

尤も大銀杏を結える力士は皆無で、全力士が大銀杏のカツラをかぶった。

カツラは協会からの支給で、サイズは十種類あったが、自分の頭に合うものがない力士は、試しにカツラをかぶってやった稽古中も、よく大銀杏を飛ばしたものである。

そこで本場所では、特注の接着剤を使用することに。

西園寺理事長は、自費を使えば経費節減も必要ないとも考えたが、それでは面白くないとの最終判断をした。

他に美容整形医と看護師が用意された。

美容整形医は各部屋に出張し、アンコはともかくソッポ、というよりモヤシの薄っぺらで皺くちゃの胸や尻に、シリコンを注入したり、希望者には、顔の皺取りシミ取り疣取りをすでにやってくれていた。

看護師は担架や車椅子とともに土俵下にも待機していて、力士の卒倒や骨折やおもらしなどに、迅速に対応してくれることになっていた。

協会として定款は作らなかつたし作る気もなかつたが、養成管理体制の弱体を補うための、

「シニア力士十戒」

だけは作った。

- 一、師匠の言葉に逆らうべからず。
- 二、土俵での事は文句つけるべからず。
- 三、稽古中も本場所でも逃亡するべからず。
- 四、怪我をしても嘆くべからず。
- 五、他の力士に迷惑をかけるべからず。
- 六、土俵の外で鬭争するべからず。
- 七、相撲隠語は使用するべからず。
- 八、内部事情は外部に漏らすべからず。
- 九、女性にうつつをぬかすべからず。
- 十、相撲以外の事にうつつをぬかすべからず。

(但しこれは公式サイトなどには載せず、シニア力士にビラを配ったのみである)

*

さあいよいよ五月五日の初場所初日がやってきた。

練馬区石神井公園の裏地に、三年前にできた、
「都立シルバー運動センター」。

砂かぶりと折り畳み椅子席のみの簡易な観客席とちがって、立派な土俵は、昭和六年の夏場所から定まった内径十五尺である。

ただ、

「吊り天井」

がないのは予算の問題もあるが、これは伊勢神宮と同じ、

「神明造」

であり、神事的要素を極力省いているのは、日本相撲協会に対する深謀遠慮もある。

同様の理由で、

「土俵祭」

も行なわれなかった。

他に立派だったのは、取組み終了後にシニア力士たちが入る風呂で、もともこのセンターに備えられていた浴場だから、国技館の風呂の十倍は大きかった。

三千名入る会場に、観客が十分の一しか入っていないのは、協会関係者にとってさすがに期待はずれであった。

力士の家族、主に息子とか娘とか孫ばかりで、

地方出身の力士の家族の姿は見えない。

折角熟考した強そうな四股名で呼ばずに、

「じいじがんばれ」

なんてやっている。

三役になれば増えるさと西園寺理事長は嘯くが、取組みが進んでもちっとも増えない。

勝敗は協会のホームページに発表されるから、それを見ればいいというわけだ。

予想通りというか練習不足というか、トラブルが続出した。

惚けている力士、忘れっぽい力士、恥知らずの力士、人生どうでもよくなっている力士が多いせいである。

大銀杏をかぶってこないとか、まわしを締めてこないとか。

二日酔いで千鳥足とか、トイレに入ったままいつまでも出てこないとか。

そういうものは不戦敗にするからいいが、親方衆にとっていちばん頭が痛いのはその姿であった。

大相撲でも、繃帯、サポーター、すね当てひざ当て、湿布薬、バンドエイドなど付けている力士ばかりで、きれいな力士はひとりもない。

けれどもシニア相撲ともなると、それらに加えて、眼帯、マスク、腹巻き、コル

セット、靴下、手袋。

なかには背中に鍼を何本も刺したハリネズミ姿のやつや、子供たちいわく、

「ミイラの怪物みたい」

なやつもいるのだから、

「シニアプロレスみたい」

と観客がいうのも無理はない。

さて取組のほうであるが、多くの力士がまったくうまくいかなかったのは、案の定立ち合いであった。

両者阿吽の呼吸で立たねばならないのだが、力士のどちらかがつかけるならまだしも、闘争心がないのか厭がっているのか、両者ともなかなか立とうとしない。

業を煮やした行司が、勝手に「のこったのこった」とやっても駄目なので、軍配団扇を放り投げて怒りを示す。

けれどもこの力士行司も、自分の取組ではちっとも立たなかったのだから、文句をいえた義理ではない。

しまいには審判席の親方衆が、掛け声とともに力士それぞれの背中を押して、なんとか辻褄を合わせたものであった。

最も湧いたのが、腹水がたまって腹がパンパンの小結断崖山と、シリコン入れてマッコの関脇鮫乃海の一番。

これは両者やるきまんまんだから、行司など無視してお互いぶちかました。

大銀杏がだいぶずれたがなんのその、

〈張り手〉

をかますわ、猛烈に、

〈突っ張り〉

するわ、

〈のどわ〉

もぐいぐいやるわ、ときとして蹴飛ばしたりまでして敵意をむきだしにする。

あとで小川部長が事情聴取をしたら、少年時代に恋敵だったそうで、半世紀経っても対抗意識が消えていないとのこと。

それだけであそこまではやるまいと、ふたりの履歴を確認したら、どちらも舞台役者だった。

しかもそれぞれ、

「お客さまは神様です」

「観ていただいてなんぼです」

が口癖だったとのこと。

余興相撲の、

「初っ切り」

とまではいかないが、あれは演技の一環なのかとすらおもわれたものであった。

それはともかく鮫乃海の強烈な押しに、断崖山は徳俵で必死にこらえる。

でも鮫乃海のマッコは外見だけだから、相手を土俵下に突き落とすだけの余力

はない。

逆襲に出た断崖山は、鮫乃海を腹に乗せて吊る。

吊ったはいいが、吊り出す技も吊り落とす力もないから、自分が腰砕けになる。

そこを柔道経験者の鮫乃海が外掛けをかけたが、ヨガ教室に通っていた断崖山は弓なりになってこらえる。

十分経っても勝負がつかず、(水入りの制度は設けていないから) 審判団は時間の問題もあるし再試合にしようと思顔を見合わせるものの、結果オーライ。

断崖山が組み合っている最中に、急に腹痛を起し、

「腸捻転だあ」

と騒ぐので、

「痛み分け」

とした。

千秋楽結びの一番は、東西の大関の取組だったが、両力士相星二勝七敗の体たらくで、さっぱり盛り上がらなかった。

しかも西の大関勝勝山が、東の大関大天楽の鼻息だけですっ転んで、あっけなく勝負がついてしまった。

それでもなんとかシニア相撲初場所十日間が終了し、予想に反して死者はなく、負傷者五名を数えるのみであった。

場所後、番付編成会議を行なった親方衆は、稽古と本場所ではまったくちがうとの認識はあったが、これほどまでとはおもいもよらず、大幅な変更を余儀なくされた。

それ以上に頭を悩ませたのは、各力士の勝敗表で、三十名の力士のうち、五勝五敗が半数もいる。

しかもその総てが八百長相撲の臭いがする。

たとえばこんな具合である。

一富士 ○●●●●○○○●○

二鷹 ●○○○●●●○○●

三那須火 ●●●○○○●●○○

つまり九日目まで四勝五敗の力士は、千秋楽かならず白星が付き、五勝四敗の力士は、かならず黒星が付く。

「負け越さなければ親方から金一封が出る」

と公言してしまった西園寺理事長は反省し、次の九月場所からは十一日間とすることを提言し、親方衆全員一致で決まった。

加えて、五勝五敗の力士に対して相手が忖度することも考慮し、

「千秋楽で勝った力士には親方から金一封が出る」

と通達した。

西園寺理事長は、

「大相撲道は任侠道であるから付度も必要」
との信条を持っていたが、シニア相撲は別次元とかんがえ、
「シニア力士十戒」
の特別追加項目として、
「八百長するべからず」
も付加した。

いい忘れたが優勝は、東前頭筆頭の甲冑鵬で、九勝一敗、殊勲賞は甲冑鵬を破った武者岩、敢闘賞は千秋楽まで優勝を争った望力団、技能賞は、
〈足取り〉

で七番勝った足摺岬に決まった。

簡素な授賞式は行なったが、優勝パレードはやらなかった。

よって新しい番付では、甲冑鵬と望力団が東西の大関となる。

ちなみに番付表は勘亭流ではなく、パソコンで打ってプリントしただけのものであった。

二

場所が終わって一段落した十日後、各部屋に新弟子希望者が、文字通り殺到した。親方衆は対応に追われながら、この青天の霹靂の原因を話し合った。

退職後のシニア世代にとっては報酬が悪くはないからだろう。

いや、四股名がかっこいいのでその気になったのではないか。

いや、幾つになっても男は闘争本能があるんだよ。

いや、露出狂が押し寄せたんだろう。

いや、タダで美容整形ができるからなんだ。

あれこれ自説を述べたが、小川部長が息子の情報だといって、

「断崖山と鮫乃海の取組が人気コスプレタレントのユーチューブ動画で、再生回数百万回以上になっている」

とのこと。

それは会場で自撮りされたものであったが、そのバックに微かに映る奇々怪々のシニア相撲の方に、みんな惹き付けられたのである。

ネットのことには無知でも、どうあれ有難や有難やと親方衆は感涙にむせんだ。

あとで検証してみると、全国のホームレスがロコミで大挙集結したことがわかったのであるが。

というわけで、九月場所は幕内のみではなく、十両と幕下も番付表に組み込むこととしたが、それでもすぐに足りなくなって、三段目、序二段、序の口も組み込んだ。

また、もと人気プロレスラーと、もと柔道の金メダリストが新弟子になったので、横綱審議委員会なんかないもんだから、このさいこの二人を横綱にしようと、会議を開いて親方衆の総意で決めた。

あつという間に百名を越えたシニア力士の、平均身長は一六九センチで平均体重は六九キロ。

だから身長一九三センチ体重九十三キロの大日本海、身長一八七センチ体重一〇五キロの金太郎雨の横綱に、だれも文句はなかった。

この席上、

「横綱土俵入りと弓取り式」

は要らないとしても、顔見せとしての、

「十両幕内土俵入り」

はやるべきだろうとの意見が出て、賛成多数で決まった。

なお、更なる親方衆の派遣を日本相撲協会に懇請したが、これからは親方もシニアから選んだらいいと断わられた。

夏のあいだに七名の力士が入院し、そのうち八十歳を越えた三名が死亡した。

これは、稽古のやりすぎとか、ちゃんこの食べ過ぎとか、河豚中毒とか、暴行事件とかいうことではなく、猛暑のために持病が悪化したのである。

とは、シニア大相撲協会の発表であるが、真偽は定かではない。

遺族たちが協会に対して賠償金を求める訴訟を起こそうとしたが、契約規定にそういうものが入っていないことが確認され、協会から香典が出るに及んで不平不満者は土俵外へ押し出された。

他にもいろいろあったが、九月場所は始まった。

この場所で顕著だったのは、

「スー女」(相撲女子)

ならぬ、

「シースー女」(シニア相撲女子)

の登場で、部屋にも会場にもスマホを掲げた若い女性が屯し、土俵の勝敗には無頓着に、

「あのおじいちゃん可愛い」

なんてやりはじめたことである。

もうひとつ顕著だったのは、東西の横綱大日本海と金太郎雨の取り口である。

その烈しさ荒っぽさは、所属していたプロレス団体と柔道協会を破門になったうつぶんばらしか。

あるいはもともと弱い者いじめが好きだったとしか、事情通には思われなかった。

NHKテレビ大相撲解説の舞の海は、

「武士道のものあはれも横綱の品格」

と著作に書いているが、その言葉を引き合いに出して、横綱失格の烙印を捺す親方もあった。

けれどもその烈しく荒っぽい取り口が、ネット動画で流されたり、ツイッターに書き込まれると、なんとそれらの再生検索回数は、日本のみならず全世界に及び、初日のみで伝説のピコ太郎越えとなった。

その取り口を簡単に解説すると、西の横綱金太郎雨の相手は、前頭二枚目で容姿

も二枚目の鬼乃花。

金太郎雨は立つやいなや鬼乃花の前みつを掴むと、揉みあげのごとく頭上に掲げる。

どうするかと観客が目をこらすと、金太郎雨は餅つきでもするしぐさで鬼乃花を土俵に叩き付ける。

両足から崩れ落ちた鬼乃花は、這って土俵下に逃れ落ちると、両足骨折の痛みに耐えかね鬼の形相になる。

それでも、

「人間辛抱だ」

という初代若乃花の言葉を、学生時代から人生訓にしていた鬼乃花は、ショック死するまで咳払いほどの呻き声も漏らさなかった。

結びの一番、東の横綱大日本海の相手は、前頭三枚目で容姿も三枚目の江戸泉。

江戸泉は無鉄砲に突っ込むと、大日本海の強烈無比の〈勝ちあげ〉をくらって目が回る。

そのまま倒れるはずのところを大日本海はまわしを掴んで振り回し、十回振り回したところで江戸泉を解放する。

江戸泉は観客席まで吹っ飛び、血まみれのまま失神し失禁した。

横綱相撲ではなく横綱の相撲が目当てで、二日目は観客が倍増した。

両横綱にとっては相手は子供、いや病人と同じであった。

治療も手術もさせないで引導を渡す極悪坊主になった気分で、大日本と金太郎はますます張り切った。

大日本海の相手は、マニアックな人気があるといわれる小結魔弐巫。

大日本海の取り口は、魔弐巫の人気に妬いているふうで、立ち合いの、〈勝ちあげ〉

で顎をかまされた魔弐巫は、頸椎損傷で半身不随となってしまった。

金太郎雨の相手は、自他ともに満身創痕を認める関脇満月祭。

金太郎雨は大日本の勝ち方を土俵下で観ていて、わしもやったると鼻息が凄まじかった。

その鼻息で飛ばされればよかったが、満月祭は土俵際で残ってしまったのが不幸であった。

襲いかかる金太郎雨に強引に首を抱えられると、

〈首投げ〉

で吹っ飛ばされ、満月祭も頸椎損傷で半身不随となってしまった。

これらの動画がSNSで発信され、スマホのライン等で噂が拡散されると、かつては存在さえ知らない者が大半の都立シルバー運動センターには観客が殺到した。

どうやら日本人は、本質的に弱いものいじめが大好きらしい。

相撲関係者ならずともそうおもいはじめていたが、外国人の観客もやたらに増えてきて、弱いものいじめが大好きなのは世界共通だとわかってきた。

初場所七勝三敗で幕尻から筆頭まで躍進した力士に、剣鳩山がいる。

もと大学教授で、非力ではシニア角界一といわれているが、体力や技術がなくともなんとか頭を使って勝てないものかと、日々相撲研究に余念がない。

剣嶋山のモットーは、

「人間死ぬまで自分との闘いであり、勉強なのだ」

という、大横綱大鵬の言葉である。

初場所の白星はすべて、考えに考え抜いたいわゆる、

「注文相撲」

であった。

立ち合い跳んで、

〈いなし〉

たり、

〈けたぐり〉

したり、

〈とったり〉

したり、

〈あみうち〉

したり。

ときとして、

「後の先」

で立って、相手の目の前でばちんと手を合わせる、

〈猫だまし〉

や、待ったをかけたふりをして、相手が力を抜いたところに、

〈もろ差し〉

で貼り付くという、姑息な戦法もとったりした。

初場所のビデオを観て、両横綱が最も警戒したのは、小兵の剣嶋山である。

その剣嶋山と大日本海は四日目に、剣嶋山と金太郎雨は五日目に対戦することが決まった。

あんまり剣嶋山が策を弄するなら、冥土に送ってやろうと両横綱は燃えていた。

かたや剣嶋山の方は冷静な気持で、あの手この手で勝つつもりでいる自分は、もしも運良く勝つことができなければ、冥土に送られるだろうとおもっていた。

そこで剣嶋山は、高額生命保険に入る手続きと契約を、早急に済ませた。

万一の場合ひとり遺される、発達障害の娘のことがなによりも気掛かりだったからである。

社会の高齢化のために、六十歳を越えても入れる死亡保険が充実してきていることを知っていたのである。

いよいよ四日目がきて、結び前に取る剣嶋山はぎりぎりまで考え抜いていた。

そして五歳のときに街頭のテレビで観た、横綱鏡里を転がした前頭鳴門海の取り口を真似ることにした。

鳴門海になったつもりの剣鳩山は、目の前の大日本海を鏡里に見立てた。

和式便所で大便をしている恰好で、腰を低く降ろし、両手は泥鰯掬いさながら下から上へと揺動させる。

蹲踞から仕切りまでそんなしぐさを繰り返し、立ち上がると剣鳩山は大日本海の張り差しをかいくぐる。

狙いどおり〈もろざし〉になると、大日本海の太鼓腹に頭を付ける。

大日本海は外側から強く抱え込みしぼりあげる、

〈かんぬき〉

で応戦する。

そのまま相手の腕をきめにきめて、

〈きめ出し〉

にするつもりで渾身の力を込める。

剣鳩山は鳴門海流の、

〈下手投げ〉

を打つが、腕が痺れておもいどおりにいかない。

そこで左足で内掛け、右手で相手の左足を取り、頭を胸に突き付ける、

〈三所攻め〉

を仕掛ける。

びくともしなかったが、それでも何度か試みてみると、大日本海が土俵に尻餅をつきそうになる。

だがあやうく尻餅をつきそうになったために、ついに大日本海は凄まじい形相で剣鳩山の両腕をへし折る。

剣鳩山は、

「まいった」

といたのだが、相撲に、

「まった」

はあっても、まいったはない。

大日本海は剣鳩山のへし折った両腕を肩に担いで、

〈一本背負い〉

ならぬ、

〈二本背負い〉

で土俵に叩き付ける。

剣鳩山は娘の名を呼ぶひまもなく即死した。

したがって、五日目の金太郎雨は不戦勝となった。

*

翌日からも大日本海は手加減する気配もなく、

〈はりま投げ〉

〈やぐら投げ〉
〈掴み投げ〉
〈吊り落とし〉
〈そくび落とし〉
〈きめ倒し〉
〈さばおり〉

などの荒技で勝ち続けた。

九日目まで、対戦相手すべてに大怪我を負わせた金太郎雨の、十日目の相手は西の大関望力団であった。

望力団は、もと暴力団の組長で、蹲踞の姿勢のとき自慢の強面で童顔の金太郎雨を睨みつけるが、逆に睨み返されると恐怖心で膝が笑い体が震えだし、その姿勢のまま動けなくなる。

行司が仕切りを忘れたのかと思い、

「次はさがりをさばいて手をつくんだよ」

と耳打ちすると、

「そうしたいのはやまやまだが腰が抜けて動けん」

と蚊ほどの声でいったので、審判団協議の結果不戦敗となった。

修羅場をくぐってきたはずの命知らずの自分なのに、本当は命が惜しかったと気づいて、羞恥心のあまり望力団は即日引退した。

千秋楽結びの一番は、予想どおり大日本海と金太郎雨の十戦全勝どうしの闘いとなった。

会場の四方の壁には、

「満員御礼」

の垂れ幕が初めて下がった。

大日本海にはこのときすでに、

「死刑執行人」

の渾名が付き、金太郎雨にはこのときすでに、

「屠殺屋」

の渾名が付いていた。

観客のだれもが、どちらかが殺されることを想像し、前日から賭けも頻繁に行なわれていた。

どちらかが勝つということは、どちらかが生き残るということに等しかった。

固唾をのんで見守る者、さかんに拍手を送る者、酒臭い奇声をあげる者、観客はさまざまでも会場の熱気はまるで真夏であった。

けれども、相撲はひどいもいいで。

いや、相撲になってもいかなかった。

凄い歓声のなか立ち上がっても、突っ張るでも組むでもなく土俵中央でジャンケンして、負けた方が自ら土俵を割るという呆気ない打ち止めに、観客席からは座布団が飛びに飛んだ。

三

優勝力士三賞力士にはまったくスポットライトが当たらず、テレビや新聞や週刊誌で初めて取り上げたのは、九月場所の総括、つまり死傷者の数であった。

死者十三名、負傷者三十九名、尤もこれは両横綱と対戦した相手のみならず、十両以下の力士もくわえたもの。

民放のワイドショーで、コメンテーターに呼ばれたのは、シニア相撲ファンの芸人オカマコンビ、白星金星だった。

MCに、

「シニア相撲の魅力ってなんですか」

と聞かれた白星は、

「お肉ってね腐りかけが美味しいのよん」

と答えたものであった。

MCに、

「最屑してるシニア力士ってだれですか」

と聞かれた金星は、

「十両の仁義酸肝ったら、ジェームス・ディーンが長生きしたらああなるって見本なのよん」

と答えたものであった。

MCは死者や負傷者に関しては触れなかった。

そこに触れたのは週刊誌で、自他ともに認める好角家三名による、「シニア相撲総見」と題する鼎談を組んだ。

自称、

「顔は鬼でも心は仏」

の時代小説作家・鬼面山竜、

「天は三物を与えた」

といわれる歌手・歌多蛇房、キャッチフレーズは、

「七つの顔を持つ男」

のバイプレイヤー俳優・大銀杏琴弥である。

鬼面山☆それにしてもずいぶんと犠牲者が出たもんじゃな。

歌多蛇☆とくに大日本と金太郎、ああいうの許していいんですか。

大銀杏☆江戸の雷電だって、相手をたくさん殺しているからね。土俵の上の事だから仕方ないのさ。

歌多蛇☆江戸時代と現代とではちがうでしょう。

大銀杏☆それが同じかも。相撲は伝統が大切だから、内実は神事でなくとも、見世物として神事が必要なんだよ。

歌多蛇☆シニア相撲はちがうわね、神事を無視している。エンターテインメント

性がないから、いわばアマチュア。アマチュアのスポーツで犠牲者が出たら、廃止するか見直すかふつうはかんがえるでしょうね。

鬼面山☆ふつうじゃないんだな、これが。わしはシニア大相撲協会法なんてものが出て来たときに、勘付いておったよ。アマチュアは最初だけで、いずれプロ中のプロ、しかも命知らずの格闘技のプロになる。なぜならこれは、高齢化対策の一環じゃからとね。

歌多蛇☆気休め程度には、高齢化対策になるかもしれないわね。仕事にありつける人が一人でも増えれば。

鬼面山☆その逆じゃ。つまりな、老人は年々増え続けるが、年金の金庫は小さくなる一方。景気が良くなったなんてのは、一部大企業だけの話だから、庶民、とくに老人は大袈裟ではなく食うや食わず。生活保護の予算も頭打ちだし、もう限界なんじゃよ。

歌多蛇☆要するに老人雇用対策というわけですね。

鬼面山☆そんな甘いもんじゃない。姥捨山じゃ。その証拠に、巡業はやらんだろ。巡業はガチンコになりえないからじゃ。

歌多蛇☆げげっ、深沢七郎ですか。檜山節考。

大銀杏☆あれは、おりんばあさんが喜んで山へ行くんだよ。シニア大相撲協会は、老人が騙されて行くお山だろうが。

鬼面山☆それがじつは、初めはそうかもしれないとわしもおもったが、いまやシニア力士の大半が、姥捨山とわかっていて、いやわかっているから応募しているんじゃ。

大銀杏☆それでだれも訴えようとしなないんだね。なんとなくお国のおもう壺って感じだなあ。

歌多蛇☆お国だってこういう展開は読めなかったでしょうね。

鬼面山☆老人が一人でも二人でも減ってくれればと。けれども予算からかんがえて大きな期待はしていなかったとおもうな。わしにいわせれば、高齢化対策の末端の計画なんだが、このままでは三年もしたら、末端どころか尖端になりそうじゃな。

大銀杏☆なるほどね。そのころになると一場所で死者もおそらく五十人、いまは三場所だが、いずれ一年を十場所に拡大して、年間五百人、十年で五千人。老人一人当たり、お国は年間二百万円を支出しているので、一千億の経費削減だぜ。

歌多蛇☆ぎょぎょ。織田信長、ヒットラー、スターリン、ポルポトなどの大虐殺を想起するわね。

大銀杏☆独裁的な権力を持たせるとだいたいそうなる。いまの日本も隠れ独裁だからね。国民が悪いんだ。

鬼面山☆老人大虐殺ってのは、老人でない者の希望じゃよ。あんたもそうじゃろ。

歌多蛇☆わたしは敬老精神のかたまりよ。それなくして伝統文化も歌心もないわ。

大銀杏☆そうさ、老俳優がいなくなったら、俳優は老け役で苦労しなくちゃならない。その点作家は想像力も創造力も若いときだけでしょ。選考委員しかやらない老作家は必要ないのかも。

鬼面山☆莫迦をいっちゃいかん。本来作家は老人の仕事なんじゃよ。青二才の出る幕じゃない。

大銀杏☆老人万歳か。老人のイキイキしている国はいい国だよ。

鬼面山☆老人はさ、むやみに長生きしたくて老人やっているわけではない。最後の一花咲かせたいというのが本音じゃ。

大銀杏☆相手をいっぱい殺しちゃった横綱の大日本や金太郎だって、あんなパフォーマンス続けていたら、自分だって明日はないってわかっているとおもうよ。でも人生の終わりにでっかい花火を打ち上げたい。

歌多蛇☆結局わたしたちは、シニア相撲に賛成ってことになるのかなあ。大昔のギリシャの格闘技で、敗者は勝者に打ち殺され、優勝者は神に首を捧げるって話を聞いたことあるけど、シニア相撲もあれほどではなくても、どこか似た血腥さがあるわね。

鬼面山☆人間が本当に本能に目覚めたら、血腥いものじゃ。それが人間の本性だとしたら、だれが非難できようぞ。

歌多蛇☆そうね。セクハラパワハラで、男性はいつもハラハラしていて、本能とか本性なんてどこかに置き忘れて来ているもの。

大銀杏☆お国のやろうとしていることは最低でもさ、西園寺理事長はあまりに無知でもさ、老い先短くなって、命懸けの仕事をできる環境があるって最高じゃないか。昼の上で死にたくない老人はシニア相撲に来たれか。

鬼面山☆ううむ、わしも行きたい。

歌多蛇☆先生ならペンネームをそのまま四股名にできるわね。(笑)

鬼面山☆きみたちだって同じじゃよ。(笑)

歌多蛇☆わたしも行きたいけど、女性は土俵にあげられないでしょ。

鬼面山☆わしにいわせれば、それは神聖性を強調したいだけの恰好つけでね。相撲は、五穀豊穰を神様に祈願する、神事として行なわれた儀式が、起源とされている。その神様というのが、女神だったらしい。それで土俵に女を上げると、女神様が嫉妬する。そんな現実ばなれしたことをいまでも信じているはずはない。じつはだれもいわないけど『日本書紀』に女相撲の記録があるんじゃないよ。シニア相撲はいずれ女性もOKさ。姥捨山の姥は老女の事だもの。(笑)

歌多蛇☆あたしは姥は姥でも姥桜。ところでテレビ放映やるかしら。

大銀杏☆人気沸騰なものな。テレビ局が放っておかないさ。

鬼面山☆わしの情報では、スポーツ庁がそれに待ったをかけたらしいのう。殺伐相撲なんていわれているからだが、そのうち殺人相撲っていわれかねない。血腥さをリアルタイムでは観せられない。いま協会と協議中らしいが、ファンの要望も凄いやいから、ダイジェスト番組でお茶を濁すことになるはず。血腥い取組は放映しなけりゃいいんじゃないから。

歌多蛇☆いずれにしても先が愉しみね。

鬼面山☆この現実が、フィクションかと勘ちがいすることがある。

大銀杏☆でも事実は小説より奇なりっていいますからね。

これも産みの苦しみか。

この鼎談が載った号が発売されたその日、両横綱が急死した。

予約制や人数制限なんか決めていないものだから、稽古場に見学者が押し寄せ、若い女性の黄色い声が飛び交うなか、調子に乗った大日本海は、体重百五十キロの幕下極端山を、可愛がりのあまり頭上高く持ち上げ、鉄砲柱に叩き付けようとして力んだ途端、脳の血管がぷすんと切れた。

金太郎雨の方は、これも同じ状況のなか調子に乗って、幕下力士十名相手に千切っては投げ千切っては投げやっていたら、やはり脳の血管がぱちんと切れた。

それぞれの部屋のおかみさんが、失神して救急車で運ばれたりもしたが、西園寺理事長以下シニア大相撲協会は、大慌てするどころか、淡々と粛々と事を納め、新しい横綱に元キックボクサーの鬼菊丸と元J I選手の舅岳を配置した。

縁起が悪いと横綱になるのを厭がったので、横綱にかぎってあれこれ世話をやいてくれる付け人をつけることで合意した。

そうそう、このときすでに各力士に四股名の変更を指示していた。

つまり殺伐たる四股名をやめて、キラキラネームも含め華麗で愛らしく明るい四股名にせよ、ということである。

そこでそれぞれ変えた四股名は、花散里、奇麗谷、美的山、華の岩、愛染川、椿光、菫風、鈴蘭岬、向日葵、陽ノ国、恋葉寺、桃児利、夢芝居、飛鳥灘、吉良屋敷、金銀高山、波緋勇無、木遣波未波無などなどである。

鬼菊丸は菊ノ村に、舅岳は咲果林に改名した。

名は体をあらわす、なかどうか、両横綱の急死が影響した、なかどうか、次第次第に稽古がきわめてヤワになった。

まるでシニア力士がみんなオカマ力士になったのかと見物人がおもったほどだが、

(まあ本場所で本気を出してくれればいい)

と、どの部屋の親方もたかをくくっていた。

十二月場所の前売券は完売となった。

となると西園寺理事長がいった法螺が現実になって、あちこちの物好きな企業から懸賞金を出したいとの申し入れがあった。

大相撲では懸賞幕一本六万二千元だが、シニア相撲では一本一万円として、懸賞金の受け取り方も念入りに練習をした。

とはいえ神事に適った、

「手刀」

などはやめて、札もしくは札束を行司が軍配に乗せて、空中に放り投げるのをキャッチする方法とした。

前売券完売のためか、満員御礼のためか、それとも懸賞金が出ることになったためか。

初日に、

「協会挨拶」

が行なわれ、横綱大関を従えて土俵上に立った西園寺理事長が、いささかゴーマンかました長過ぎる挨拶を述べた。

その主意は、大きく三つあった。

一、お国にはそれ相応の思惑もあろうが、当協会はそんな思惑を付度せず、というよりまた別の次元でガチンコの真剣勝負をやっていく。(万一ジャンケン勝負なんぞをやる力士があれば即刻引退させる)

二、世間では、「死のう団」なんぞと中傷する輩がすくなくならずいるが、そんな風潮には耳を傾けず、今後も変わらず死を怖れない命懸けの土俵をお目にかける。(万一臆病風を吹かして土俵を逃げ回る力士があれば即刻引退させる)

三、シニア大相撲協会は日本相撲協会とは全く異質の組織であり、我らはむろんのことお客さまにも比較しないしてほしいし、比較しても意味がないと認識してほしい。

(万一比較したいのなら、神事か否かという次元で比べてもらいたい)

西園寺理事長渾身の挨拶にもかかわらず、幕下ではこんな取組があった。

もとタクシードライバー兼タクシー強盗の美的山七十一歳と、ホームレス歴四十年の花散里六十九歳の取組。

ジャンケンはやらなかったが、あっちむいてホイをやって、負けた美的山が手錠をかけられた恰好で土俵外へ出た。

協会は即刻、両力士を引退させた。

西園寺理事長渾身の挨拶にもかかわらず、十両ではこんな取組があった。

もとドサ回りの演歌歌手愛染川七十四歳と、掃除夫歴三十年の陽ノ国七十七歳の取組。

愛染川は、仕切り前から自慢の喉で奇声を発し続けた。

たぶん陽ノ国を威嚇するつもりでやったのだが、功を奏して陽ノ国は臆病風を吹かし、空咳を繰り返すと審判にインフルエンザに罹ったと嘘をいって、背中を丸めて土俵を降りた。

協会は即刻、両力士を引退させた。

西園寺理事長渾身の挨拶にもかかわらず、幕内ではこんな取組があった。

もと牧師華の岩七十歳と、現在最高齢九十歳の鈴蘭岬の取組。

「プロテスタント監督教会」

から破門されたはずの華の岩が、土俵に上がると敬虔なクリスチャンよろしく胸の前で十字を切り声にも出して祈りに祈った。

耳は遠く目も霞んでいた鈴蘭岬は、相手が待ったをかけたのかとおもい、立ち上がる素振りを一切見せず、結果無気力相撲となった。

協会は即刻、両力士を引退させた。

西園寺理事長渾身の挨拶のためか、東西の横綱菊ノ村と咲果林の相撲は烈しく

荒々しかった。

無精髭を生やした咲果林は、身長百七十五センチ、体重六十八キロ。

相手を威圧する体格ではなかったが、立ち上がると烈しい、

〈頭つき〉

一発で、もと砲丸投げ選手、関脇向日葵百二十キロを徳俵まで吹っ飛ばした。

こらえる向日葵の額に再び頭つきをくらわし、たまらず土俵を割ったのに、

「駄目押し」

で何度も頭つきをくらわし、向日葵の頭は割れて脳味噌が飛び出した。

担架で支度部屋に戻った向日葵は既に死亡していて、協会は駄目押しを繰り返した咲果林を即刻引退させた。

日焼けサロンの常連菊ノ村は、身長百七十センチ体重七十キロ。

相手を威圧する体格ではなかったが、酒でも飲んでいるのかとおもわせるくらい、馬力を発揮。

立ち上がるやいなや、

「禁じ手」

を炸裂させた。

拳骨で殴る蹴るの連発で、もとハンマー投げ選手、小結董風百二十キロは昏倒した。

担架で支度部屋に戻った董風は、既に死亡していて、協会は禁じ手を使った菊ノ村を即刻引退させた。

片っ端から引退させても、シニア力士予備軍は五万といて、協会はなんの心配も痛痒も感じなかった。

引退させられた菊ノ村と咲果林は、のちに自分のキャラクターをゲーム会社に売り、作られたゲームソフトはバカ売れした。

中日（なかび）に、西園寺理事長を訪ねて面会を希望する人物があった。

なかなかの紳士とのことで、理事長室で会ってみると、名刺に、

「全国障害者支援センター／対策本部長」

との肩書き。

用件は募集要項の、

「六、大病歴、手術歴、持病の有無を問わない」

「七、前科、精神障害の有無を問わない」

を盾にとり、今後身体障害者枠も作ってほしいとの要請である。

部屋も会場もいまだバリアフリーになっていないが、障害の程度次第で受け入れる旨を即答した理事長は、

「いずれパラリンピックで相撲競技をくわえてもらう運動を共にしましょう」

とまで伝えた。

なぜなら西園寺理事長にとっては、

（現在のシニア力士の三割は身体障害者となんら変わるものではない）

といった感覚であったから。

対策本部長は歓喜し、さっそく身体障害者三十名を送り込んで来た。
さすがに車椅子の人はいなかったが、義手義足の人はいた。
どこからも物言いはなかった。

四

二月場所の東西横綱は、先場所準優勝の秋桜と身体障害者の風花。
横綱が定着しないことには、協会はさておきファンとしては落ち着かない、との
申し入れが、急ごしらえの、
「シニア相撲ファンクラブ」
からあった。
それを受けての決定である。
両力士は実力もさることながら、温厚でだれからも親しまれる人格者との折り紙
付き。
いままでの横綱とちがって、
「タコ（天狗）」
になる心配もなかった。
年齢も六十代前半の働き盛り、シニア力士盛りである。
たしかに両横綱の取り口は、文句のつけようもないもので。
身長百七十七センチ体重七十七キロ。
もとトレーナーの秋桜は、四十代にしか見えない肉体美。
【左上手・右おっつけ】
の堂々たる型があり、立ち合い直後その型に持ち込むと、あとは電車道。
身長百七十九センチ体重八十二キロ。
もと漁師の風花は、だれよりも精悍な面構え。
鮫に食われて右腕が鋼鉄製の義手だったが、それを使って相手を張ったりかちあ
げたりは決してしなかった。
立ち上がるやいなや、
【左差し・右前みつ】
の万全の型を作ると、ゆくりなく、
〈すくい投げ〉
で相手を転がした。
人気急上昇の両横綱は、得意の型で白星を重ねた。
場所中、西園寺理事長は小川部長と相談し、これだけ人気が出ると日本相撲協会
もいずれだまっちはいないだろうから、いまからあれこれ対策を講じておこうとい
うことになった。
小川部長は、有名好角家による、
「第三者委員会」
を設置した。

選ばれたのは、作家の鬼面山竜、歌手の歌多蛇房、俳優の大銀杏琴弥の三名である。

週刊誌でぺらぺら喋るようなぐあいにはいかんと、三名はガチンコの鼎談を繰り返し、それぞれの博識と見識とをおおいに発揮した。

鬼面山☆さてときみたち、今回は雑談しとる場合ではないのう。

大銀杏☆ぼくらのお役目は、日本相撲協会に対しての忖度ですかね。

歌多蛇☆わたしには苦手ね。オブザーバーにさせてもらうわ。

鬼面山☆ならばギャラは半分じゃ。

歌多蛇☆ひどい。それなら頑張っちゃうかな。

大銀杏☆忖度が厭なら改革でいかが。巡業は今後もやらないとして、まずは本場所の設定ですかね。日本相撲協会のスケジュールに抵触しないよう、シニア相撲の本場所は、一月、三月、五月、七月、九月、十一月をはずす。

歌多蛇☆しかも年六場所から一つすくない、年五場所に設定するってのはどうかしら。

鬼面山☆どこが苦手じゃ。やはり女性は、気のつかいかたがちがうのう。ではシニア相撲の本場所は、二月と四月と六月。八月は練馬も暑いからやめて、十月と十二月ということではよかろう。

大銀杏☆会場もすこし増やさないといけないね。都立シルバー運動センターだって、年四回も貸せないでしょう。

歌多蛇☆両国国技館があるから墨田区はやめるとして、世田谷区、新宿区、渋谷区もイメージに合わないわね。他は足立区と葛飾区というのはいかがしら。

大銀杏☆あそこには都立シルバー運動センターはないから、区立体育館と交渉かな。

鬼面山☆本場所と会場はそれでいくとして、次はなかみじゃのう。神事的要素の無視は、これからも継続するというので。大相撲の改革を唱えてきたあの貴乃花も、神事神事とよく口にしていたけれどもものう。神事なんてことにこだわっていて、改革が成されるとはおもわれん。歌多蛇☆ただし、意識的に日本相撲協会に対抗している様子を、見せないことも大切ね。

鬼面山☆そうじゃな。したがって、大相撲通のシニア力士が神事的要素を、たまたま行なってしまっても、それも無視するってことかな。

大銀杏☆四股、手刀、塩まきのふりなどなどね。

鬼面山☆そういうこっちゃ。シニア力士だって、ああいういかにもお相撲さんってこと、やりたがるはずさ。

歌多蛇☆女性の参加って、長年の課題はどうなのよ。

鬼面山☆女相撲は現在もあるんだが、神事ではなくスポーツでね。そういう意味ではやるべし。お国の思惑を忖度すれば、いずれはシニア女相撲協会というのもつくらなきゃいかんが、それはお国がやることで。

歌多蛇☆とりあえず、女性が土俵に上がるということはどうかな。

鬼面山☆そんな機会があるかね。

歌多蛇☆たとえば千秋楽が終わった後で、サービスのために土俵に上げるとか。

鬼面山☆上げるだけかい。

歌多蛇☆会場にダンスミュージックかければ、バブル時代のディスコの再現になるわ。

鬼面山☆土俵がお立ち台ってわけか。いいねえ、やるべしやるべし。

歌多蛇☆それが決まれば、この会議は打ち止めね。

鬼面山☆おっとまだまだ。折角だから、このさいこの人気を維持させるために、日本相撲協会との差別化を継続推進し、独自性を出すってことを、真剣にかんがえたいのう。ただしこれみよがしではなく、対外的PR抜きで対応するが、内々では厳しく徹底化をはかるってやりかたかな。

大銀杏☆差別化か。身体障害者を力士にしているのなんか、その最たるものだね。

歌多蛇☆どうせならロボットとかクローンも参加させてほしいわね。

鬼面山☆奇を衒うのと差別化は別じゃ。

大銀杏☆そんならぼくは常々既成の大相撲に不満があるのよ。そこを洗い出して、差別化させたらどうかな。

歌多蛇☆わたしは不満なんかないけど、とりあえずいってみてよ。

大銀杏☆ならば遠慮なく。いまの大相撲は、引き技があまりにも多すぎやしないかい。

鬼面山☆たしかにな、〈はたきこみ〉〈つきおとし〉〈ひきおとし〉〈かたすかし〉が多いのう。決まり手の半分以上が引き技の場所もあるでな。

歌多蛇☆ということは、シニア相撲は引き技を禁じ手にするわけね。

鬼面山☆禁じ手までは難しくとも、内々では厳しく徹底化をはかるってことで拍手を打つかいな。

大銀杏☆それとマス席の問題だよ。大企業やタニマチが独占しちゃって、一般にはチケットが手に入らない。

歌多蛇☆あら、マス席も作る気なの。

鬼面山☆マス席はわしが協会にかけあってみる。マス席がなくとも砂かぶりとか見やすい椅子席は、いずれ大企業やタニマチに独占される心配はあるのう。そうじゃ、チケットを前売りなしの当日券のみにしてはどうかな。

歌多蛇☆賛成。ファンはみな平等。

大銀杏☆十両幕内土俵入りのときだけどさ、化粧廻しも要らないかなあ。

歌多蛇☆要らないわ。

大銀杏☆そう断定しないでよ。たしかに形ばかりの伝統なんか文化ではない。ところが、文化は形から入るといふ専門家もいる。そうでないと、大銀杏を結わない、学生相撲さながらの丸坊主の力士が出てくると危惧するね。

歌多蛇☆でもさ、土俵は野球でいうとグラウンドで、大関・横綱は野球でいうとクリーンアップで、行司はアンパイアで、呼び出しはウグイス嬢で、相撲部屋はチームで、支度部屋はロッカーで云々とかんがえると、昔はいざ知らず、大相撲だっ

てスポーツなのよね。

鬼面山☆化粧廻しについてはシニア力士それぞれでどうかな。タニマチやファンに寄贈されちゃったシニア力士は、宝のもちぐされになってしまうぞ。

歌多蛇☆差別ね。差別化はいいけど差別は駄目よ。そんなことより、ファンの立場でかんがえるとさあ、人気のシニア力士のグッズがほしいわね。

大銀杏☆爺さんの顔がアップの、Tシャツなんかほしいかなあ。

歌多蛇☆そんなんじゃないなくて、四股名だけでいいわ。大相撲は、キーホルダーからクッキーまであるけど、やっぱり【うちわ・てぬぐい・ふろしき】が三種の神器でしょ。同じアナログなら、可愛くさあ、レターセットとか色鉛筆とかぬいぐるみとかさあ。

大銀杏☆なにがさあだよ。同じさあならサーフィンとかスノボとかの関連グッズ。

歌多蛇☆シニアのイメージにそぐわないわねえ。

鬼面山☆そぐわないくらいでないと、差別化にならんからな。

歌多蛇☆じゃあ、サッカーやベースボールグッズもよろしくね。

大銀杏☆相撲なのに、サッカーとベースボールかい。

鬼面山☆それはええのう。相撲はスポーツだという暗黙のPRじゃ。

歌多蛇☆あとさあ、弁当とかお菓子とか販売しないの。

鬼面山☆きっと食中毒を怖れているんじゃないな。シニア力士は死んでもいいが、お客さんに死なれては困る。まあ持ち込み自由ってことでいけば、何かあっても協会責任は免れる。

大銀杏☆姑息だけど仕方ないね。こまかいことはともかくとして、大きいことは決まったからこのへんで。

歌多蛇☆もうおしまいなの。なんか物足りない。

鬼面山☆小説もさ、物足りないくらいが傑作なんじゃよ。

大銀杏☆演技もそうです。

歌多蛇☆歌もそうね。

第三者委員会の報告を受けた西園寺理事長と小川部長は、その総ての提案を採用し、スポーツ庁に報告した。

さらに毎年一回、その都度メンバーを替え第三者委員会を行なうことに決め、鬼面山竜、歌多蛇房、大銀杏琴弥の三者には横綱審議委員及び特別顧問を依頼した。

特別顧問とは重大問題発生の際の諮問機関、及び第三者委員会員であるが、西園寺理事長と小川部長がかくべつ気にかけていたのは、いずれスポーツ庁が深く強く介入してくる可能性であった。

いずれにしても三者は、いよいよシニア相撲にどっぷり浸かることとなったのである。

シニア相撲二月場所十一日間の集計は、死者四名、負傷者四十七名。

この集計に、スポーツ庁は合格点を与えた。

そんなことよりも特筆すべきは、

「シニア相撲ダイジェスト」

の平均視聴率が二十%を越えたことである。

千秋楽結びの一番、全勝どうしの東横綱秋桜対西横綱風花の瞬間視聴率は四十九%であった。

風花の全勝優勝は全国の障害者に大きな勇気を与え、テレビでも新聞でもネットでも、大臣のスキャンダルよりも大きく取り上げられた。

死者と負傷者の数は、この感動的なニュースの影に隠れた。

ちなみに上位力士の星取は以下のとおりである。

| | |
|---------|-------------------------|
| 東横綱／秋桜 | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● |
| 西横綱／風花 | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ |
| 東大関／大天楽 | ● ● ● ● ○ ● ○ ● ● ● ○ |
| 西大関／勝勝山 | ● ● ● ● ○ ● ● ● ○ ○ ● |
| 東関脇／恋葉寺 | ● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ |
| 西関脇／桃児利 | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● |
| 東小結／玉玉川 | ○ ○ ○ ● ○ ● ● ● ○ ● ○ |
| 西小結／夢芝居 | ● ○ ● ○ ● ● ○ ○ ○ ○ ○ ● |

新しい番付では、風花が東の横綱となり、三勝八敗の両大関は十勝一敗の両関脇と入れ替わった。

恋葉寺と桃児利は外連味のないその取口から、俄然横綱候補として名乗りをあげた。

横綱審議委員会は、次の四月場所で優勝すれば横綱に推挙する旨を協会側に伝えた。

シニア相撲ファンは、四横綱時代の到来を期待していた。

五

不祥事が発生したのは、四月場所を三日後に控えたときであった。

新大関の恋葉寺と桃児利が、とつぜん炎のごとく駆け落ちしたのである。

小川部長が、それぞれの部屋の力士に事情聴取をすると、両力士は知る人ぞ知る男色関係にあったのだという者があらわれた。

そういえば、と小川部長は千秋楽の恋葉寺対桃児利の取り口を思い出した。

外連味のない相撲で客席を沸かしたのはそれまでと変わりはないが、決まり手は〈送り出し〉であった。

恋葉寺が腰を桃児利の尻に押し付けて送り出したのであったが、その押し付け方その押し付けられ方が、妖しげではあった。

じっさい恋葉寺と桃児利は、この道(男色道ではなく相撲道)で一緒に死のうと、固く約束をしてシニア相撲界に入った。

けれども現実問題として、毎場所これだけ死者や負傷者が出てみると恐怖感に寄り切られ、一緒に死ぬよりも一緒に生きようと、だれにも告げずに遁走したのである。

この道行は週刊誌の記事になり、テレビでは同性愛のコメンテーターも羨ましさのあまり騒ぎ立てたので、場所中でありながらも、小川部長が面倒腐そうな顔で会見をした。

カメラ百台、記者百人に注視され、こんな経験は現役時代にもない小川部長は、口ごもりながら朴訥な表現で報告と謝罪をした。

すぐにレポーターが質問する。

「部屋でいじめや暴力はなかったのですか」

小川部長は苦笑しながら、

「高齢者ですからそんな元気は」

と答えただけ。

別のレポーターが質問する。

「同性愛に対する協会としての見解はいかがでしょう」

小川部長は苦笑しながら、

「高齢者ですから勝手にすれば」

と答えただけ。

別のレポーターが質問する。

「他のシニア力士に動揺はありませんか」

小川部長は苦笑しながら、

「高齢者ですから感覚が鈍っていて」

と答えただけ。

同じレポーターが質問した。

「横綱候補がいなくなり人気面で心配はありませんか」

小川部長は苦笑しながら、

「高齢者ですから人気なんか」

と答えただけ。

翌日の新聞には、

〈小川部長、高齢者差別〉

と大きく見出しが出た。

西園寺理事長はすぐに、部長を小山親方に変えた。

親方衆のなかで最高齢者であるという理由だけで。

それで騒動は収まった。

四月場所も満員御礼が続いた。

ファンの期待は、東の横綱風花の連続全勝優勝と、新顔の十両付出し花見川の土俵である。

花見川は九十九歳だが、もと学生相撲の横綱ということで特例措置になっていた。

この場所からマス席も作り、持ち込み自由にしたので、館内はまるでお花見状態

であった。

観客は飲むわ食うわ歌うわ踊るわで土俵どころではないが、花見川の取組と風花の取組のときだけは応援に集中した。

花見川は、蹲踞の姿勢から膝を伸ばすのに、五分かかった。

仕切りから立ち上がるまでは、おおよそ七分かかった。

それでも本人はいたってポーカーフェイス。

そんなところにも観客は興奮した。

花見川はほとんど身体を動かさなかった（動かせなかったのかもしれない）けれども、さすがに昔取った杵柄で相撲の勝ち方を知っていた。

もそもそくちゃくちゃやりながら、いつのまにか勝っている。

逆に風花は堂々たる横綱相撲で勝ち続ける。

ファンのなかには、風花と花見川の一戦を見たいと望む者がいた。

しかし十両上位と幕内下位はやっても、さすがに十両付出しと東の横綱はやらない。

とだれもおもっていたが、西の横綱秋桜が九日目の取組でギックリ腰になり十日目から休場したので、千秋楽結びの一番に風花と花見川の取組が実現した。

ネットでは、人気取りにばかり夢中な西園寺理事長の独り相撲だとか、横綱審議委員兼特別顧問である鬼面山竜のゴリ押しだとか書かれたが、真偽のほどは定かでない。

また大相撲始まって以来の歴史的珍事とも書かれたが、シニア相撲は別物とかんがえている協会は気にも止めなかった。

*

しかしながらこの対戦は、シニア相撲の歴史に残る大一番であった。

花見川の遅すぎる立ち会いに苛立つ気配もなく受けて立った風花は、【左差し・右前みつ】

の万全の型をとらず、

〈もろ差し〉

になった花見川を鋼鉄製の右腕も使い、上手を引き付けて吊り上げると、花見川を怪我させないようにゆっくりゆっくりと土俵際まで持っていく。

すると花見川は両足を風花の腰に巻き付ける。

このままでは、

〈勇み足〉

になってしまう。

風花は花見川の両足をふりほどこうと、腰をフラダンスさながら烈しく揺り動かす。

ところがそれをやればやるほど、花見川の両足は上へ上へとあがっていき、とうとう風花の胸に巻き付いてしまう。

しだいに呼吸困難になった風花は、そのまま後ろへひっくり返った。
それ以外に呼吸する方法がなかったのである。

結果、

〈あびせ倒し〉

で花見川の勝ち。

というわけで四月場所は、風花が十勝一敗で幕内優勝、花見川は十一戦全勝で十両優勝。

風花は十両に破れたことを恥として優勝パレードを固辞したが、ファンの熱望で代わりに花見川が優勝パレードを行なった。

それから十三日経って、百歳の誕生日に花見川は死去した。

遺族は死因を公表しなかったが、一週間後に出た週刊誌は、

「自殺」

と断定した。

辞世の句は、

【人生百年ガチンコ相撲】。

したがって四月場所前後の死者は、花見川も含めて七名、負傷者は六十九名となった。

六

六月場所も予定どおり行なわれることとなった。

場所前から、東横綱の風花と、ギックリ腰が治った西横綱の秋桜の人気は相変わらず凄く、新大関の玉玉川と夢芝居がそれに続いた。

他には前頭筆頭の緋牡丹と前頭二枚目の蟬時雨が人気であった。

シニア大相撲協会の親方衆は、シニア相撲人気が不動になったと安堵し自信さえ持った。

肩の荷が降りたせいなのか、いままでの心労がいつぺんに出たのか、それとも目的がほぼ達せられたと判断したのか、それとも天敵である探偵、麻暮正作にいよいよ追い詰められてしまったのか、と後に噂されたが、西園寺理事長が突如辞任したのである。

とにかく壁にぶちあたりそうになったら、名前を変えるか、顔を変えるか、姿を変えるしかないというのが、西園寺金時の考えで、いくらやり方を変えても、同じ名前、同じ顔、同じ姿のものがやったなら、同じ穴のムジナになる、というのが確固たる信念であった。

小山部長が高齢を理由に、当然のごとく二代目理事長を固持すると、それならやはり外部から招聘しようではないかとの声があがり、多数決でそうなった。

一任された小山部長は、横綱審議委員兼特別顧問の鬼面山竜に白羽の矢を立てた。

鬼面山としては、毒喰わば皿までの気持は充分にあったのだが、急に発生した動悸、息切れ、不整脈、血糖値と血圧の上昇により、担当医からドクターストップが

かかってしまった。

そして代わりの理事長に（西園寺とのかねてからの約束通り）旧友の作家、羅生門斜陽を推挙した。

親方衆はもちろんシニア力士のだれもがその名を知らなかったが、鬼面山からあれこれいわれ、小山部長は渋々納得し決定した。

そのあれこれは以下のとおり。

「わしの知るかぎり、理事長の器は羅生門斜陽氏をおいて他になし」

「鬼面山先生のお言葉ですが、いいいくらなんでも知名度が低すぎるのでは。私は芥川龍之介の『羅生門』と、太宰治の『斜陽』なら知っていますがね」

「よくぞいうた。羅生門氏は芥川から太宰を引いたごとき存在よ」

「おおお言葉ですが、プラスではなくマイナスということは、イコールゼロ以下になるのでは」

「よくぞいうた。羅生門氏はマイナスではなくマイナーな作家だが、己をゼロにして世間に奉仕できる人物よ」

「おおお言葉ですが、世間通よりも相撲通でないと困りますよ」

「心配ご無用。やくみつるやデーモン閣下に匹敵する相撲通じゃ。なにせ相撲に関する本を七冊も出しておるでな」

「それは凄い。どういうものでしょうか」

「ええと、『なぜ男女ノ川は下足番になったのか』『なぜ岩風は潜航艇と呼ばれたのか』『なぜ東富士はプロレスに行ったのか』『なぜ明荷谷はマッチョだったのか』『なぜ玉の海は現役横綱のまま死んだのか』『なぜ白馬は故意による無気力相撲を取ったのか』『なぜ白馬富士は引退に追いこまれたのか』じゃ。わしは記憶力抜群じゃのう」

「それはさておいて、なぜかなぜばかりですね」

「どの世界も謎に満ち満ちておる。相撲界も例外ではない。解明できずとも世界の謎に立ち向かうのが作家じゃ」

「読んだことも聞いたこともありませんね」

「みんな自費出版じゃからのう。寄贈されたが、まだわしも読んではいない」

「そんなことで大丈夫でしょうか」

「太鼓判を捺すぞ」

「いえ先生。寄贈されたのに読まないなんて。化粧廻しを贈られて締めない力士はいませんよ」

「締めるのと読むのとではいささかちがう」

「化粧廻しが届けば、しめしめとおもうが、本が届いても、のほほんとするばかりじゃ」

「それって洒落でしょうか、それとも冗談」

「冗談じゃない。わしを信用できんのなら、横綱審議委員会も特別顧問会も解散じゃ」

「とんでもない。先生を信用しないでだれを信用するんでしょう」

「なら、いいな」

「なら、い、い、いいです」

「どうでもいいって顔じゃのう」

「もともとこういう顔です」

鬼面山に対して下手に出るしかなく、もうどうでもいいというおもいであった小山部長は、羅生門新理事長に初見したさい、これは会ってから決定すればよかったと後悔した。

それほどに羅生門斜陽は、容貌魁偉、お化けの頭領「ぬらりひょん」に似ていると小山部長は感じた。

(小山部長は、羅生門＝西園寺であることを見抜けなかったのである)

しかもどんな台詞も嫌味たっぷり、くわえて口をひん曲げての笑いかたは皮肉っぽい。

もしも初場所の土俵上で理事長挨拶なんかやられると、観客はみんな吐気を催し逃げ出してしまうかもしれない。

合口のわるさを実感しつつも、どうにかなると自分にいきかせた小山部長は、(心機一転を目指した) 羅生門理事長がさっそく行なった改革、というよりも独り相撲に啞然とした。

親方も満六十歳になったら親方兼務で、シニア力士として土俵に立つこと。

もうすでに六十歳を越えている親方は、すみやかにシニア力士となること。

そのさい役職が付いている者は他に譲ること。

(七十歳の小山親方はすみやかにシニア力士にさせられ、部長の後任は小海親方となった)

以上を恒例とすることを強引に定めた。

(ちなみに小山親方は雁小山という四股名で、特例の幕内付出し)

またシニア相撲のキャラクターとキャッチフレーズを、電通の外注先であるデザイン会社の、

「デンデンデン」

に依頼した。

提示された案はかなり安易なものであったが、羅生門理事長はこれでよしと満足げにうなずいた。

キャラクターは、

「座頭市のマンガ」

で、これは、

「ハンデがあっても強い」

という意味とのこと。

キャッチフレーズは、

「サバイバルSUMO」

で、これは本場所を見るかぎり納得できるが、じっさいはいくら不幸があっても毎場所新弟子がいくらでも入るので、サバイバルというよりもゴキブリが似合う。

理事長もわかってはいたが、ゴキブリにするわけにはいかないのでサバイバルでOKを出した。

それからはシニア力士が着るゆかたにはすべて、このキャラクターとこのキャッチフレーズが入ることとなった。

これが予想外に好評で、ファンがほしがる。

そこで成人男女と男女児のゆかたを、各部屋と会場で販売することにした。

そしてこの売り上げが協会の経営を潤すことになったのだから、親方衆は、「ゆかたでゆたかになった」

といい合った。

すっかり天狗になった、と野次馬が噂したが、実は計画通りであった羅生門理事長は、あの手この手を繰り出した。

たとえば無料サービス企画として、握手会やサイン会や撮影会セクハラ会などを催した。

セクハラ会とは、力士のシリコン入りの胸や尻をタッチしたり、まわしのなかに手を差し込んだりできるもので、一番の人気だった。

他にもいろいろあるが、もっとくだらない内容なので割愛する。

さて六月場所だが、人気力士たちの活躍が観客を湧かせた。

そのなかには、新たに人気力士になった雁小山も入っている。

| | |
|-----------|----------|
| 東横綱／風花 | ○○○○○○○○ |
| 西横綱／秋桜 | ○○○○○●● |
| 東大関／玉玉川 | ○●○○○○○ |
| 西大関／夢芝居 | ○○●○○○○ |
| 前頭筆頭／緋牡丹 | ○○○●○○○ |
| 前頭二枚目／蟬時雨 | ●○○○○○○ |
| 幕内付出し／雁小山 | ○○○○○○○ |

けれどもこうして並べてみると、ギックリ腰をやった影響からか、秋桜の二敗が目立つ。

そこで千秋楽結びの一番は、横綱同志よりも風花と雁小山を対戦させるべきとの親方衆の声があり、小海部長はその線で準備をした。

しかし予想は外れるためにある。

風花は、八日目から三連敗、三連勝の秋桜の星のほうがよくなってしまった。

こうなったら横綱同志を対戦させるしかない。

かたや雁小山も風花につきあって三連敗。

他の人気力士は星のつぶしあいをして、千秋楽結びの一番が終ってみるとこういう結果になっていた。

| | |
|-----------|-------------------------|
| 東横綱／風花 | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ● ○ |
| 西横綱／秋桜 | ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ○ ○ ○ ● |
| 東大関／玉玉川 | ○ ● ○ ○ ○ ○ ○ ● ○ ○ ● |
| 西大関／夢芝居 | ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ● ● ○ ○ |
| 前頭筆頭／緋牡丹 | ○ ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○ ● ● |
| 前頭二枚目／蟬時雨 | ● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ○ ○ |
| 幕内付出し／雁小山 | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ● ○ |

要するに八勝三敗の七力士で、優勝決定戦となったのである。

とはいえこういう例はかつて大相撲でもないので、どういうやりかたをしたらいいのか親方衆は頭を抱えた。

そこに羅生門理事長の鶴の一声で、こういうやりかたになった。

まず雁小山と蟬時雨とが対戦して、勝者が非牡丹とやる。

その勝者が夢芝居とやり、またその勝者が玉玉川とやり、またその勝者が秋桜とやる。

最後に残ったシニア力士が風花とやる。

なんとなく権威主義だとおもった親方はいたが、理事長の説明によると、東横綱は立場を重んじてシードとした。

シニア力士にとって続けて二番以上はきついから、優勝は必然的に風花となり、協会の面子も守られファンも満足する。

しかし机上の空論は外れるためにある。

雁小山が蟬時雨を〈上手投げ〉で破り、続けて緋牡丹を〈下手投げ〉で破り、続けて夢芝居を〈寄り切り〉、続けて玉玉川を〈吊り出し〉、とうとう秋桜も〈うちやり〉、いよいよ風花との一戦になった。

雁小山はすでに疲れ果てて意識朦朧状態、かたや風花は休養充分。

計算どおりだったはずが、ここでさすがの羅生門理事長も脇の甘さを痛感し頭を抱えた。

じつは風花は、(雁小山の) 小山部屋所属なのである。

現役力士にとって、親方は親同然かそれ以上、なんていわれる。

親方よりも高齢のシニア力士にとっては、それ以上ではないがそれ以下ともいえない。

親方兼力士にしてしまったツケが、こんなところに出た。

危惧したとおり風花は、無気力相撲で雁小山に勝ちを譲った。

むろんのこと観客は座布団を飛ばし、口々に、

「八百長だ」

とさけぶ。

けれども場所後、雁小山が過労死すると、風花の八百長こそ、

「武士の情」

ということになり、風花の人気はますます高まった。

風花は小山部屋を継ぎ、親方兼力士となった。
なお六月場所の集計は、雁小山を含めて死者十一名、負傷者百三名であった。
さらに猛暑の八月に、シニア力士七名が他界した。

七

次の十月場所の番付上位力士は以下のとおり。

東横綱／風花
西横綱／秋桜
東大関／玉玉川
西大関／夢芝居
東関脇／緋牡丹
西関脇／蟬時雨
東小結／波緋勇無
西小結／木遣波未波無

観客が騒いだのは三日目。

かたや波緋勇無、こなた木遣波未波無の小結同志。

力士行司も高齢者だから呂律が回らない。

「波緋勇無（ばひゅーむ）」

はまがりなりにも呼び上げたが、

「木遣波未波無（きやりーばみゅばみゅ）」

の力士名をまったくいえない。

野次が飛び交い、小海部長はすぐさま行司を代えたが、代わった行司もまったく駄目。

これはこんな四股名にした力士本人がわるいと、羅生門理事長は四日目から四股名を変えるよう命じた。

そこで波緋勇無は波錦に、木遣波未波無は木遣岳になった。

この変更が刺戟になったのか、両力士の成績は抜群で観客の声援も日増しに大きくなった。

十日目を終えて成績上位は以下のとおり。

木遣岳 ○○○○○○○○○○
風花 ○○○○○○○○○●
波錦 ○○●○○○○○○○
秋桜 ●○○○○○○○●○○

成績を鑑み、千秋楽の取組は、木遣岳対風花、波錦対秋桜となった。

協会の思惑どおり風花は木遣岳に勝ったが、協会の思惑に反して秋桜は波錦に負けてしまった。

その結果、風花、木遣岳、波錦の三力士が十勝一敗で、優勝決定戦は巴戦に決まった。

これはかつて大相撲にもあるから、そのやりかたでいった。

要するに、対戦相手に二連勝した力士が優勝となるわけである。

これなら実力的に、風花の優勝にすんなり決まるだろう。

そう協会はかんがえたが、そう簡単にはいかなかった。

思惑は外れるためがあると、羅生門理事長は苦笑したが、その苦笑が一時間後には苦笑となっていた。

何度やっても、二連勝の力士が出ないので、優勝が決まらない。

勝ったり負けたりで二時間経過。

三力士ともへろへろになったので、三十分の休憩をとることになったが、時間が経てば経つほど観客も疲れてくるし酔っぱらう。

取組が再開されると、酔っぱらったファンが何人も土俵にあがり、最良力士を応援する。

それのみか、代わりに自分が闘おうとする者まで出る始末である。

力士のほうもとっくにうんざりしているから、どうぞどうぞと頭を下げる。

審判だって行司だって、疲れて思考能力がなくなっているから、だれも止めようがない。

それでファン同志がジャンケンやって、三人が決まり代行戦が始まった。

結果は木遣岳の代行者が二連勝して、木遣岳の優勝が決まった。

場所後の横綱審議委員会で、鬼面山竜が木遣岳と波錦の活躍をベタ誉めし、大相撲でもめったにない四横綱を主張したので、番付編成会議において以下のとおり決まった。

東横綱／風花

西横綱／秋桜

東張出横綱／木遣岳

西張出横綱／波錦

東大関／玉玉川

西大関／夢芝居

東関脇／緋牡丹

西関脇／蟬時雨

東小結／左近桜

西小結／右近橘

新小結の左近桜と右近橘は、中川部屋に入って間もない六十代の兄弟力士で、ふたりとも現役の剣道師範だから、気合いが物凄かった。

中川部屋は荻窪にあったが、稽古での両力士の気合いは阿佐ヶ谷まで聞こえたという。

ファンというものは何にでも飛びつくもので、この話題はネットを席卷した。

作家として無名のせいも、話題性に弱い羅生門理事長は、軟派の木遣岳と波錦ではなく、硬派の左近桜と右近橋を横綱にすべきだったと、鬼面山に食ってかかった。

すると鬼面山は、

「わしも理事長に羅生門斜陽氏ではなく金閣寺雪国氏を推挙すべきだった」

といいかげんな返答とした。

なぜなら、羅生門の就任は、あらかじめ西園寺から指示されていたことなのであって、鬼面山の力の及ぶところではなかったからだ。

金閣寺の名を出された羅生門は、苦虫（たぶんゴキブリ）を嘔み潰した顔になった。

羅生門にとって金閣寺は呪い殺したい、すくなくとも文壇という土俵の外に突き出したい作家であった。

書評家の定説では、羅生門斜陽は、

【キワモノめいた軽薄で不埒な相撲読み物作家】

であるのに比べ、金閣寺雪国は、

【歴史性を重視した重厚且つ甘美な相撲小説作家】

である。

しかも知名度は羅生門が0%であるのに、金閣寺は50%もある。

くわえて売れ行きは羅生門が何を出しても百冊前後であるのに、金閣寺は五万部から十万部。

そこに小海部長からケイタイに連絡があった。

それは、

「相撲作家の金閣寺雪国氏が新弟子応募してきたのだが、どういう扱いにしたらいのか」

というものだった。

信じられない羅生門は、応募用紙の理由欄を読み上げるよう伝えた。

小海部長はしばしもたもたしていたが、ようやく読み上げた。

【机上の想像のみでは、迫真の描写なぞ望めない。相撲作家たるもの、文芸的精進のためにも、自ら相撲取りとなって、現場を体感すべきとかんがえた】

「小癩な若造め」

とつぶやいたあと、羅生門理事長は幕内付け出しにするよう伝えた。

幕下十両あたりだと、本場所の土俵にあがっても大怪我で済むが、幕内なら即死まちがいなし、と踏んだからである。

十月場所が始まった。

すでに独裁者になりつつあった西園寺＝羅生門理事長は、金閣寺の相手として強力な東大関玉玉川を配した。

だが、取組のモニターを観ていた理事長は愕然とする。

自分を例に作家なんかひ弱に決まっている、とおもいこんでいたのである。

それが裸になった金閣寺の肉体は、半端ではない。

着痩せするタイプだったのだろうが、聞くところによると、二十年前から内密にボディビルに精を出していたとのこと。

筋肉隆々で引き締まった肉体は、玉玉川をはるかに凌駕している。

小柄だが、まるで「ウルフ」と呼ばれた)千代の富士に似ている。

取り口もそっくりで、玉玉川のまわしを引き付けると、そのまま一気に寄り切ってしまった。

観客はやんややんやで、金閣寺の人気は急激に高まり、拍手の音は横綱風花に匹敵した。

はやくも新ヒーローの誕生である。

苦虫(たぶんゴキブリ)を嘔み潰したぬらりひょん理事長は、金閣寺を四横綱にぶつけるよう小海部長に命じた。

急遽二日目から変更取組表が関係者に配られ、金閣寺の対戦相手は、二日目西張出横綱波錦、三日目東張出横綱木遣岳、四日目西横綱秋桜、五日目東横綱風花と決まった。

ところが現在のシニア相撲を代表する四横綱も、ニューウルフニューヒーローの敵ではなかった。

波錦は簡単に吊り出され、木遣岳は瞬時に突き出され、秋桜は難なく押し出された。

風花だけは善戦した。

右上手左おっつけで寄り立てる金閣寺の圧力に土俵際で堪え、土俵中央まで押し返す。

金閣寺はまた寄り立てる。

風花は土俵際で堪え、また土俵中央まで押し返す。

それが七度繰り返され、観客は興奮しきり。

八度目の寄りで、強引にうっちゃる。

金閣寺の手が早くついたようにおもわれたが、風花も体がない。

行司の団扇は風花にあがったが、物言いがつき、ビデオ確認もして、結果〈かばい手〉で行司差しちがえとなった。

十日目を終えて成績上位は以下のとおり。

左近桜 ○○○○○○○○○○

右近橋 ○○○○○○○○○○

金閣寺 ○○○○○○○○○○

| | |
|-----|-----------------------|
| 風花 | ○ ○ ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○ ○ |
| 秋桜 | ○ ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● |
| 木遣岳 | ○ ○ ● ○ ○ ○ ● ○ ○ ● |
| 波錦 | ○ ● ○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○ |

左近桜と右近橋は同部屋なので戦わないから、千秋楽に両力士が勝てば、全勝同志兄弟同志の優勝決定戦になり、盛り上がりは必定。

秋桜はすでに優勝圏外、金閣寺も含め三力士が揃って負けるとはかんがえられないから、一敗の風花も圏外になりそう。

終始機嫌のわるい羅生門理事長は、千秋楽の金閣寺の相手に、シニア相撲随一の乱暴者、幕内三枚目蘭呆山を当てたが、運わるく金閣寺が勝ってしまった場合をかんがえておいた。

優勝決定戦のやりかたを、二対一にすることである。

いくら破竹の勢いの金閣寺でも、左から左近桜に攻められ、右から右近橋に攻められれば身動きとれまい。

さらにあらかじめ両力士を呼んで、竹刀を使用するよう命じた。

首をかしげる両力士に、シニア相撲のライバルはプロレスだから、まずはプロレスのパフォーマンスを真似たいのだと伝えた。

さて金閣寺対蘭呆山の一戦であるが、立ち上がるやいなや金閣寺が技をかけたわけでもないのに、蘭呆山はすべって転んで呆気なく一秒で終わってしまった。

のこるは左近桜と右近橋であるが、この両力士もなぜか呆気なく負けてしまった。

二対一の卑怯な勝負なんかやりたくなかったから、わざと負けたのだが、理事長の怒りは頂点に達した。

左近桜と右近橋とを即刻クビにただけでなく、金閣寺に優勝賜杯を渡すのも小海部長にさせて、どうしたら金閣寺もクビにできるか、あるいは文字通り抹殺できるか、そればかりを思案した。

そこで「相撲交流会」と称し、日本相撲協会の理事長となんとか話をつけ、大相撲の優勝力士とシニア相撲の優勝力士を立ち合わせる企画をたてた。

つまり、大相撲九月場所の優勝力士龍鵬と、シニア相撲十月場所の優勝力士金閣寺との世紀の一戦が決まったのである。

羅生門理事長は（これで金閣寺の即死はまちがいなし）とほくそ笑んだが、この企画の発表を待たずに、金閣寺はすみやかに引退した。

理由は全く不明であったが、相撲作家金閣寺にとっては、一度も負けなかったことが禍いした。

すぐさま発表した新聞の連載小説は、いままでとちがってナルシズムとヒロイズムが顕著になり、数回で読者に完全に嫌われ、打ち切りになってしまったのである。

溜飲が下がったためか羅生門理事長は、毎日大酒を飲むようになり、短期間で

っかりアル中になってしまった。

十二月場所を十日後に控えた或る日、月刊誌の、「相撲は国技か・大討論会」

という企画で、羅生門理事長は両国のちゃんこ屋に招かれた。

わざと遅れて行ってみると、ちゃんこ屋の特別室には、鬼面山竜、大銀杏琴弥、歌多蛇房、そして金閣寺雪国も来ていた。

羅生門が遅刻の詫びをひとつもいわなかったのも、月刊誌の編集長の司会で大討論会なるものはすぐに始まった。

編集長☆本日は大御所五名にお集まりいただき、私どもといたしましても感無量でございます。つきましてはかねてお願いしてありますとおり、相撲は国技かというテーマで、遠慮なく激論を交わしていただければとかがえております。

大銀杏☆そらあ国技よ。そうでなければ国技館でやらないでしょ。

鬼面山☆それはさあ、明治四十二年に大相撲の常設館が初めて完成したときにさ、作家の江見水陰が初興行の披露文に、【そもそも相撲は日本の国技】云々と書いたものだから、年寄りたちが相談して、この常設館を国技館と命名したといわれている。他人事じゃないが、作家は嘘つきだから、水陰のいうことに信憑性はないわな。だいたいそれ以前には国技だなんてこといってないんじゃないから。

大銀杏☆でもそういうことって、お国が勝手に決めればいいことでなんじゃないの。

歌多蛇☆お国が決めなくても、当時板垣退助が【これを国技館と命名し】と式辞を読んだっていうんだから、お国が認めたってことじゃないのかしら。

鬼面山☆内実のないことを認めてものう。もともと日本の相撲はモンゴル、中国、朝鮮を経て伝わってきたもんだから、モンゴル相撲をモンゴルの国技っていうんなら納得もいくがのう。

大銀杏☆日本は日本なりの相撲を長年かけて創ってきたんだから、充分国技といってもいいとおもうがね。尤も国技といえば、お国が法律で決めたシニア相撲こそ、正真正銘の国技なんじゃないかな。

鬼面山☆そのとおりのなんじゃが、国技国技なんてこというから、ひっきょう神事神事なんてこというんじゃない。

大銀杏☆ぼくはこのごろ、大相撲は神事のおかげで、人気が続いているような気がしているんですよ。大相撲＝神事＋興行＋スポーツってことでどうでしょうか。

歌多蛇☆嫌いじゃないわ。三種の神器、三位一体。

大銀杏☆そうさ。なんでもかんでも、好き嫌いの問題でいいんじゃないかなあ。神事が好き、興行が好き、スポーツが好き。それで満足。

鬼面山☆作家的な感覚と体験でいうとこのう。三位一体とはきこえはいいが、つまりは中途半端ってこととつながるんじゃない。この世界に完全なんてものはないから、一本に絞りこまないで、どっちつかずになること請け合いじゃよ。

大銀杏☆だからそのどっちつかずの曖昧さが、日本人には受け入れやすいんじゃない

ないの。曖昧な日本の私。

鬼面山☆外国巡業だってやっているんだから、もっとインターナショナルでないとう。

歌多蛇☆歌手的な感覚と体験でいうとさ。ナショナルじゃないと、インターナショナルにならないわよ。

大銀杏☆そんな難解ないいかたでごまかさないでよ。俳優的な感覚と体験でいうとね、お客さんのいない芝居は、芝居にならないってこと。お客さんがいっぱい入って、芝居はより芝居になるってこと。

歌多蛇☆なんとなく暗に八百長を認めているみたい。

大銀杏☆八百長は認めないが、三分の一は興行だから忖度は認める。

編集長☆はてさて失礼ながら、話が大きくなってきたというか、それてきたというか。国技の問題に戻っていただけませんか。

鬼面山☆国技なんてテーマがいかん。こういうテーマだと、話が大きくなったりそれたりするのは、必然なのじゃ。

編集長☆それはそういうことで結構ですが、まだ口を開いていない羅生門先生、金閣寺先生のご意見を聞かせてもらえませんか。

羅生門☆小生にいわせれば、どうでもいい。やけっぱちでいっているのではなく、素直にどうでもいい。大相撲は国技であっても、国技でなくてもいい。神事であっても、神事でなくてもいい。スポーツ云々興行云々も同様に、どうでもいい。大相撲は大相撲として、立派に成立して大いに人気もあるんだから、それだけで充分じゃないかね。小生は及ばずながら、シニア相撲も、どうでもいいって次元を目指しているんだ。どうでもいいシニア相撲が、大相撲に匹敵する人気を確立したら、それでいいんでね。お国には何かと思惑もあるだろうが、そんなことは無視さ。シニア相撲で何人死のうが何人怪我しようが、それはお国の思惑とは関係ない。

金閣寺☆あちきも、まったく同意見ですね。力士ファースト、親方サポートっていうポリシーだけあれば、あとはどうでもいい。国技とか神事なんてことは、いいたいやつがいていけばいい。それに対して同調する意味もないし、また文句をつける必要もない。どうでもよくないものがあるとしたなら、人気ですね。あちきは、すっかり不人気の作家になって、初めて人気というもの有り難みがわかりましたよ。見えない敵と戦っている芸術家ならまだしも、世間を相手にする以上、人気がすべてを左右する。羅生門理事長のことを、独裁者だとか陰謀家だとか変質者だとかいう者がいるけど、すべてシニア相撲の人気を高めるための行動ですから、あちきは全面的に支持しますよ。

うなずきつつ聞いていた鬼面山は、
(羅生門と金閣寺は犬猿の仲だったはずだが)
と首もかしげたが、両者が、
「売れない作家」

という、同じ穴の貉的な同族意識になっていたことをまだ知らなかった。
いずれにしても羅生門と金閣寺の力説に、大銀杏も歌多蛇も声を失ったので、大
討論なる企画は、ここで終了、月刊誌に掲載されることもなかった。

*

こののち羅生門理事長は、金閣寺を副理事長のポストにすえた。
羅生門理事長と金閣寺副理事長の一致した考えは、大相撲の横綱龍鵬に匹敵する、
国民的人気のシニア横綱をつくることであった。
金閣寺はさっそく通っているスポーツジムの会員から、これぞという十人をシニ
ア相撲に引き入れた。
そのうちの一人とんとん拍子の出世頭、四股名侍無王は、たったの三場所で風花
を押しつけて東の正横綱になった。
身長百八十五センチ、体重八十五キロ、六十三歳の侍無王は、金閣寺ほどマッ
チョでもイケメンでもなかったが、そのクールな容貌とクールな取り口とで、人気は
うなぎのぼり。
週刊誌の、
「寝てみたい男」
アンケートでは、俳優の木村乙矢や政治家の大泉新太郎をおさえて堂々一位とな
った。
羅生門理事長はいよいよ、
「相撲交流会」
を実現させるときだとかんがえ、三場所連続優勝の龍鵬と連勝記録を驀進中の侍
無王の対戦を企画した。
だが日本相撲協会となかなか折り合わなかったのは、主催者がどっちかというこ
とで、それによって会場もちがってくるということである。
金閣寺副理事長は羅生門理事長に対して、ここは先輩の協会を立てるべきである
と主張した。
それにそうすれば会場は国技館となり、盛り上がりも必至とかんがえたのである。
金閣寺副理事長の説得に羅生門理事長は折れたが、こんどは主催者側が、
「ハンデ戦」
を提案してきた。
ガチンコで万一龍鵬が負けでもしたら、大相撲の面子は丸つぶれであるというこ
とで。
それもそうかと羅生門理事長は納得したが、どんなハンデにするかということ
でとうぜん意見は割れた。
主催者側は、
「龍鵬のまわしを鉄製にしてはどうか」
とやってきたが、羅生門は、

「そんな競馬みたいなことはつまらん」

と伝えた。

そうしてこう添えた。

「対戦を三回とし、二番勝った力士が勝者。侍無王はあらかじめ一勝を持つ。つまり侍無王はあと一番勝てば勝者だが、龍鵬は二番勝って勝者となる」

主催者側もそれで渋々納得したが、さて両力士に伝えたと、侍無王が納得しなかった。

侍無王の言い分は、

「相撲の魅力はガチンコー発勝負」

というものである。

それに、だいたいハンデ戦なんか姑息すぎるといいはる。

すると、龍鵬の方も侍無王の言い分に同調した。

そうしてこうもいったとのこと。

「大相撲の横綱がシニア相撲の横綱に負けるなんてことは、日本相撲協会解散よりもあり得ぬこと。よって協会の杞憂は、あり得ないことを心配しているに過ぎぬ。よって万一あり得ぬことが起きてしまったなら、日本相撲協会は解散するがよい。そうしてシニア相撲の横綱が大相撲の横綱に負けるということは、シニア大相撲協会の解散よりも必然的なこと。よって必然的なことが必然的に生じたら、シニア大相撲協会は解散するがよい」

(これはずいぶんと厄介で大袈裟なことになってきたな)と羅生門理事長は金閣寺副理事長と顔を見合わせた。

日本相撲協会はともかくとしても、大相撲を背負って立つ龍鵬は、シニア大相撲協会を潰す気だとおもわれた。

羅生門理事長も金閣寺副理事長もしばし無言でいたが、

「受けて立とうじゃないか」

と金閣寺副理事長がいうと、

「よしっ」

と羅生門理事長もうなずいた。

そして遂に五月五日の端午の節句に、国技館に於いて、大相撲の横綱龍鵬とシニア相撲の横綱侍無王との、ガチンコー発勝負の対戦が組まれることとなったのである。

この画期的な取組みの経過と結果は、うーむ、とてもとても書けないので、これにて、この物語は終了とする。